

現代中国語「人家」の使用現状

任, 暁雪

<https://doi.org/10.15017/1784627>

出版情報：地球社会統合科学研究. 5, pp.41-46, 2016-09-30. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

現代中国語「人家」の使用現状

ニン ギョウ セツ
任 暁 雪

1. はじめに

中国語における「人家」という言葉は、品詞を基準として名詞と人称代名詞に分けられる。名詞である場合は、「rénjiā」と読み、人称代名詞である場合は、「rénjia」と読む。「人家」の歴史的な観点からみると、最初は名詞の「人」と「家」を合わせて、文字通りの意味「人が住んでいる建物（ところ）」であり、その後、メトニミーに基づいて、「建物（ところ）に住んでいる人と家庭」を指すようになった。そうして、「人家」は歴史的な変遷を経て、品詞も意味も拡張し、また使用する需要に応じて、その意味は段々と変わってきた。唐代までは、「人家」は名詞のみであるため、その意味・用法は名詞のみであるが、唐代以降は人称代名詞にもなり、その意味・用法も増えてきた。本研究は現代中国語の「人家」を対象とし、それ以前の意味・用法は対象としない。

本研究は、三つの当代小説¹を取り上げ、多量のデータを利用して、現代中国語「人家」のそれぞれの意味・用法の使用状況を明らかにしたい。

2. 先行研究

「人家」を人称代名詞として使用するとき、意味・用法は多く、また文脈依拠性も強い。更に、中国語の代表的な人称代名詞「我 (wo)」「你 (ni)」「他 (ta)・她 (ta)・他们 (tamen)」と比べて、話し手自身の感情や気持ちを表すことができるという特徴があるため、その人称代名詞としての用法に注目をする研究者が多い。

まず、人称代名詞として使用する「人家」に注目し始めたのは、呂 (1980) が主編した『現代漢語八百詞』においてである。それまでの人称代名詞として使用する「人家」の研究は、少し触れているだけであり、意味や用法には詳しく言及されていなかった。呂 (1980) 以降、人称代名詞「人家」に対する研究は盛んになり、その意味及び品詞の歴史的変遷 (文法化)、多義性の原因、感情表現などが研究対象とされてきた。

その中で、多量のデータを利用して、研究者自身の観

点を客観的に考察しているものは極めて少ないと言える。今まで、多量のデータを使用しているのは3本しかないということである。それは朱・黄 (2011)、張・韓 (2011)、季 (2014) である。朱・黄 (2011) は北京大学中国語コーパス及び辞書の例文を利用して、「人家」の文法化及びその原因を考察したが、利用するデータの選ぶ理由や基準などの詳しい情報には言及していない。

張・韓 (2011) は三つのドラマの台詞を利用し、「人家」が共感という機能を持っていると指摘した。使用しているドラマの背景の年代はそれぞれ1937年-1955年、1977年-現在、1980年代-現在であり、年代や背景の違いによって、用語の表現や使用も異なっているため、筆者は研究対象として、同じもしくは近い年代のドラマを選択した。

最後は、季 (2014) は中国の最大の検索エンジン「百度 (baidu)」を利用して、「人家」をキーワードに用い、名詞として使用される「人家」を除き、人称代名詞として使用される「人家」に関する例文を挙げて、「人家」の使用頻度を述べている。それは、旁称用法²の出現頻度が一番多く、次は具体的な第三者を指す用法であり、最後は話し手自身を指す用法であるということである。

今までの先行研究の問題点は以下の四つである。

- (1) 多量のデータを利用して、客観的に考察しているものが少ない。
- (2) 「人家」の各用法の使用頻度と分布に触れる研究が極めて少なく、更に、現代以降における使用頻度の変遷に触れる研究はない。
- (3) 取り上げるデータの基準及びそれに関する詳しい情報は少ない。
- (4) 取り上げるデータに関する年代や背景は分析されていない。

3. 研究対象・データ

3.1 研究対象

本研究では、今までの研究と異なり、「人家」の人称代名詞の用法だけでなく、その名詞としての用法も含め

て、つまり、「人家」の意味・用法を全面的に捉えた研究を行う。そのため、本研究の研究対象は、「人家」の名詞と人称代名詞としての意味・用法である。そして、現在における使用頻度・分布を明らかにしたい。また、現代(1919年-1949年)と当代(1949年-現在)において、その使用頻度が変わるかどうかとも考察したい。

3. 2 データ

本研究の研究対象は現在の「人家」であるため、その特徴と基準に応じて、「继母(継母)」「蜗居(蝸居)」「欢乐颂(歡樂頌)」という三つの当代小説(1949-現在)を取り上げる。それぞれの背景の年代を以下の表1に記す。

作品名	『继母』	『蜗居』	『欢乐颂』
年代	1980年代～	1998年～	2000年以降
字数	109,724字	225,615字	390,053字

表1. 当代小説内容の年代及び字数

表1で示したように、小説の内容が発生する年代については、いずれも1980年代以降である。その背景は大体同様であり、政治・社会が安定し、持続的な経済が成長している時代である。そして、以上三つの小説は全て日常生活に非常に近い作品である。その中で、特に「蜗居」「欢乐颂」における人物間の会話や言い方は現在たいへん流行っているものである。

また、現代と当代において、その使用頻度がどう変わるかについて考察するため、以上に述べた当代小説より背景年代が少し古い現代小説(1919年-1949年)も三つ取りあげて比較したい。表2を見てみよう。

作品名	『霜叶红似二月花』	『活动变人形』	『青春之歌』
年代	1919年-1927年	1930年-1980年	1931年-1935年
字数	182,744字	260,000字	390,000字

表2. 現代小説内容の年代及び字数

表2に示したように、小説の内容が発生する年代については、いずれも1919年以降であり、しかも非常に近く、またその背景はほぼ同じである。そして、なるべく客観的に比較するため、題材も当時の日常生活に近いものを選択し、当代小説と字数が近い作品を選んだ。

4. 「人家」の使用現状

現代中国語「人家」の使用現状・頻度を述べる前に、まずその意味・用法を簡単に述べておきたい。以下は品詞を基準として、名詞及び人称代名詞という二つの部分に分けて説明する。

4. 1 名詞

- (1) [無人の野山・原始林などに対比して]人が住んでいる(と認められる)家。

例: 远上寒山石径斜, 白云生处有人家。 《山行》
(晩秋のさびさびした山を登っていくと、石ころの多いなだらかな小道が続いている。白雲の湧き上がるあたり、峯の近くに人家が見える。)

- (2) 家庭; 家族

例: 人家不象人家, 吃饭连张桌子也没有。 《上海的早晨》
(家は家らしくなく、食事の所さえないなんて。)

- (3) 嫁入り先

例: 现在也不必恨他了, 反而叫我们给莲儿选了家好人家。 《获虎之夜》
(もう彼のことを恨まなくていい。逆にうちの蓮児はいい嫁入り先を見つけてくれたもん。)

- (4) 名詞と連用して身分を表す

例: 姑娘人家(女の子)

4. 2 人称代名詞

- (1) 話し手及び聞き手以外の人を広くかつ一般的に指す。「別人」「他人」に相当している。旁称用法ともいわれている。ここで旁称という概念を説明しておく。日本語の「他人」や「別人」は普通の名詞として見なされるのに対して、中国語では、旁称詞と呼んでいる。人称代名詞の下位概念であるので、日本語の人称代名詞の部分に取り上げている。以下旁称用法で表示する。

- ① 人家都不怕, 就你怕。
他的人是だれも怖がらないのに、おまえだけは怖がっている。ⁱⁱⁱ
- ② 人家是人, 我也是人, 我就学不会?
ひとさまが人間ならおれも人間だ、覚えられないことがあるもんか。^{iv}

- (2) 話し手及び聞き手以外の具体的な第三者を指す。すでに前に現れた人を指す。大体「彼・彼女・彼ら」に相当している。文脈に出現された第三者の単数も複数も指すことができる。話し手のなんらかの気持ちを表している。以下他称用法で表示する。

- ③ 小高正在写工作小结呢, 人家哪儿有时间陪你出去。
高さんはいま中間総括を書いているところだ、彼に君のおともをするひまなんてあるものか。
- ④ 我问过好几个大夫, 人家都说这个病不要紧。
私は何人もの医者に聞いたが、みんなこの病気は大したことはないと言った。

(3) 話し手自身のことを指す。ほぼ「わたし」に相当している。少し甘えや不満の気持ちが含まれている。以下自称用法で表示する。

⑤ 你让我给你借小说, 人家借来了, 你又不看。
君が小説を借りて来てくれって言うんで、人が借りて来てやったのに、君ったら読みもしないんだから。

⑥ 你跑慢点儿行不行, 人家跟不上啊!
もうすこしゆっくり走ってくれんかね、人がついていけないじゃないか。

(4) 聞き手のことを指す。ほぼ「あなた」に相当している。話し手のなんらかの気持ちが含まれる。以下対称用法で表示する。

⑦ “他们好, 我们不好, 不当人家累赘了。”……“你也好, 就是最近你变了。你真变了。不要说别人, 连我这个粗人都觉察出来了。你看看你, 变没变, 戴了新帽子, 还穿了新鞋……” 《金光大道》

「どうせあちらは良くて、こっちは悪いんだ。もうあちらさんには厄介かけたくなえよ」……「おめえだっていい人間だ。ただ、この頃は人が変わっちゃった。本当に変わっちゃったよ。おれみてえな大ざっぱな人間にもそれがわかるくらいだ。自分を見て見ろよ、新しい帽子をかぶって、靴までおろしたてじゃねえか……」

次に、当代小説の中に出現した「人家」に関する例文を、上述の意味・用法に基づいて、分析した結果を、以下の表にまとめた。

表3から見ると、当代小説における「人家」の人称代名詞の意味・用法の割合は名詞である意味・用法より圧倒的に多いということがわかる。そして、人称代名詞として使用されるときには、それぞれの意味・用法の使用頻度がかかなり異なっている。その中で、出現頻度が一番

高いのは、「人家」の他称用法である。その次は旁称用法である。人称代名詞の中で、出現頻度が非常に低いのは自称用法である。しかも、『蜗居』と『欢乐颂』には全く使用されていない。また、対称用法はデータの中に一例もないということも分かる。自称用法及び対称用法の使用条件を満たすことはたいへん厳しく、またいろいろな制限がある。更に、自称用法よりも対称用法を使用する際の制限がより多いため、上記の結果も理解できる。

また、以上のデータよりもう一つのこと分かる。それは、「人家」のそれぞれの意味・用法の使用頻度も変わってきているということである。1の部分にも述べていたが、最初「人家」は名詞の「人」と名詞の「家」を合わせて、「人が住んでいる家」という名詞句となり、唐代から人称代名詞の下位概念である旁称詞になって、段々と他称用法や自称用法になりつつある。旁称用法はその基本用法とも言えるが、時代が下るにしたがって、旁称用法より他称用法の使用頻度が高くなってきた。

5. 「人家」各用法の使用頻度の変化

4では、「人家」の現代における使用現状を考察したが、この節では、現代小説及び当代小説における「人家」に関するデータを比べながら、その各用法における使用頻度の移り変わりを考察したい。

まず現代小説における「人家」のデータをまとめ、表4に示した。

表4から見ると、『青春之歌』という小説における「人家」の名詞である意味・用法が50%を占め、その割合は非常に高いということがわかる。そして、人称代名詞として使用される時、その中で旁称用法の出現頻度が他称用法より高い。また、自称用法の出現数が極めて低いことを示している。

次に、表3のデータと比べると、いくつかの相違点と共通点が見つかる。共通点については、現代小説も当

品詞	意味・用法・出現数 及び出現頻度	『继母』(合計 98 例)	『蜗居』(合計 172 例)	『欢乐颂』(合計 86 例)
人稱代名詞	旁稱用法	16	46	14
	出現頻度	16.3%	26.7%	16.2%
	他稱用法	76	123	67
	出現頻度	77.6%	71.5%	78%
	自稱用法	6	0	0
固有名詞	出現頻度	6.1%	0	0
	出現数	0	3	5
	出現頻度	0	1.8%	5.8%

※対称用法は一例もない。

表3. 当代小説における「人家」の使用頻度

品詞	出現数及び出現頻度	『霜叶红似二月花』 (合計 107 例)	『活动变人形』(合計 48 例)	『青春之歌』(合計 38 例)
人称代名詞	旁称用法	64	24	6
	出現頻度	59.8%	50%	15.8%
	他称用法	24	17	9
	出現頻度	22.4%	35.4%	23.6%
	自称用法	5	0	4
	出現頻度	4.7%	0	10.5%
固有名詞	出現数	14	7	19
	出現頻度	13.1%	14.6%	50%

※対称用法は一例もない。

表 4. 現代小説における「人家」の使用頻度

代小説も自称用法の出現数が低く、そして対称用法は両者とも一例もないということがわかる。もう一つは、両方とも名詞である意味・用法よりも、人称代名詞として使用する頻度が高いということである。

相違点については、現代小説に比べて、当代小説における「人家」の他称用法の出現頻度が圧倒的に多いということに対して、旁称用法のほうは比較的低いということがわかる。つまり、年代が変わるとともに、「人家」の旁称用法と他称用法のそれぞれの使用頻度が変わってきていて、旁称用法の使用頻度が段々低くなる傾向が出てきている。その原因は、旁称として使用されるときには、ほぼ同じ意味を持っている言葉がいくつかあり、例えば、「他人(taren)」「別人(bieren)」なども用いられる。それらの単語のお互いの差がそれほど小さくなく、替えて使用しても差し支えないからであると考えられる。以下の例を見てみよう。

⑧ 人家/别人是人，我也是人，我就学不会？

ひとさまが人間ならおれも人間だ、覚えられないことがあるもんか。▼

以上の例では、「人家」を「別人」に替えても問題ないと考えられる。

もう一つの傾向は他称用法の出現頻度が段々高くなってきたことである。その原因は「人家」の特徴と関係があると考えられる。その特徴とは、他称用法では典型的な人称代名詞とは異なり、指示対象を指し示すだけでなく、話し手自身の気持ちや感情も含むことである。以下に、例を挙げながら説明する。

⑨ 余永泽摆着脑袋苦笑道，“人家/他哪肯和我这落后的人在一块？当然见了我就走…… 『青春之歌』

余永沢は頭をふって、苦笑した。「ああいうお偉がたが、ぼくのような落伍分子と一緒にいたがるかね？とうぜん、ぼくの顔を見たとなんに、出ていっちゃまったよ。

⑩ “……他/人家美国有钱人，临死了，都把财产捐给社会。你什么时候看过中国人干这种事情？钱都要代代传下去，传成古董。……” 『蜗居』

「あのアメリカの金持ちは亡くなったら、みんな遺産を社会に寄付するよ。中国人はいつそんなことをするか聞いたことあるのか。お金は子孫に継ぎ、古董になるように……」

以上の例⑨では、「人家」をほぼ同じ意味を持っている「他(彼)」に替えると、文法的には成立するが、話し手が表したい気持ちは全く伝えられない。つまり、指示対象を指し示すだけに焦点を当てるなら替えても構わないが、話し手自身が表現したい気持ちに焦点を当てるなら替えられない。

また、例⑩は「人家+名詞」という特殊用法であり、例⑨と同じように話し手及び聞き手以外の第三者を指し示す。しかし、⑩では「人家」もその後ろに付けている名詞も同じ指示対象を指すため、ここでの「人家」の指示機能は弱くなる。ここでは、話し手が表現したい気持ちがより多く注目され、更に表現する気持ちは羨ましさや皮肉が多いので、替えられる言葉がないと言える。例えば、例⑩では「他美国有钱人」に替えると、伝えようとする感情と全く異なり、むしろ逆の意味になると考えられる。

最後に、「人家」の名詞の意味・用法の出現頻度が低くなる傾向も出てきている。名詞として使用するときには、「(無人の野山・原始林などに対比して)人が住んでいる(と認められる)家」という意味が基本的な意味である。以前は使用頻度が高く、特に都市から離れている田舎などで使用する頻度が高いが、急速な都市化の進行に伴い、その意味で使用する場がなくなってきた。また、現在では、結婚難の時代とともに、名詞の中にある「嫁入り先」という意味が使用されている。

以上を要約する。「人家」の旁称用法の使用頻度が段々

低くなり、他称用法のほうが高くなってきた原因は、「人家」自身の特徴と関係がある。「人家」は替えることができない特殊性をもっているため、このような傾向が出ている。

6. 終わり

本研究では、現代小説と当代小説における「人家」に関する例文を比較して分析を行なった。「人家」の使用状況については、その人称代名詞としての意味・用法の割合は、名詞としての意味・用法より圧倒的に多く、また他称用法の使用頻度が旁称用法より多い。更に、自称用法と対称用法が極めて少ないということが解明された。

現在でも「人家」の各意味・用法の使用頻度が変わってきており、以下の三つの傾向が出現していることが解明された。

- 一、旁称用法の使用頻度が段々低くなる。
- 二、他称用法の使用頻度が段々高くなる。
- 三、固有名詞としての用法の使用頻度が段々低くなる。

注：

- ⁱ ここでの当代小説とは、1949 - 現在の小説を指す。
- ⁱⁱ 旁称用法については、4.2 (1) 参照。
- ⁱⁱⁱ 『新漢日詞典』中国商務印書館・日本小学館、2003年 p.774より引用された。
- ^{iv} 『新漢日詞典』中国商務印書館・日本小学館、2003年 p.774より引用された。
- ^v 『新漢日詞典』中国商務印書館・日本小学館、2003年 p.774より引用された。

参考文献

- 1、呂 叔湘主編 (1980) 《現代漢語八百詞》商務印書館
- 2、牛島徳次・菱沼透監訳 (2003) 『中国語文法用例辞典—《現代漢語八百詞増訂本日本語版》』東方書店
- 3、朱和艶, 黄婉梅 (2011) “人称代词“人家”的语法化历程以及动因”《语言研究》2011年07期pp98-100
- 4、张旺熹, 韩超 (2011) “人称代词“人家”的劝解场景与移情功能—基于三部电视剧台词的话语分析”《语言教学与研究》2011年第6期pp44-51
- 5、季小民 (2014) “人称指示语“人家”的语用解读”《江

An Investigation into the Current Status of the Chinese word “Renjia”

Xiaoxue REN

The word “renjia” in Chinese speech is recognized as both a noun and a personal pronoun. If used as a noun it is read “rénjiā”. This changes to “rénjia” when it used as a personal pronoun. “Renjia” has undergone a transition across history; it’s meaning changing gradually over time. Until the Tang dynasty “renjia” was only a noun; it’s meaning and usage were limited. But after the Tang dynasty it began to be used as a personal pronoun, and its meaning and usage started to increase.

This study looked at three contemporary novels, and used this large pool of data to clarify the meaning of “renjia” and how it is used in contemporary Chinese households.

The following three trends have been identified with regards to the frequency with which the word is used, and how its meaning and use have transformed.

- 1) The frequency with which it is used has slowly decreased.
- 2) The frequency with which it is used to refer to other people has gradually increased.
- 3) As a noun, it’s usage has gradually decreased.